禅とは何か

― ダブルバインド型自己欺瞞の系力学 ―

宮下英明　著

Ver. 2018-04-18

文中の青色文字列は，ウェブページへのリンクであることを示しています。

禅とは何か

—— ダブルバインド型自己欺瞞の系力学 ——

本書について

本書は，

http://m-ac.jp/

のサイトで書き下ろしている『禅とは何か — ダブルバインド型自己欺瞞の系力学』を PDF 文書の形に改めたものです。

目次

0　導入 1

0.1　はじめに 2

0.2　予備知識 6

0.2.1「*色即是空空即是色*」の存在論 7

0.2.2「*涅槃*」の宗教 9

0.2.3「生活」の意味 13

0.2.4　思想と科学 15

0.2.5　＜開祖・教団＞の進化法則 17

0.2.6「*破邪顕正*」 22

0.2.7　アヴァンギャルド 25

1　学校の創設 29

1.1　禅の事業カテゴリー：学校 28

1.2　無内容で当て込み発進 31

2　学の棄却 35

2.0　要旨 36

2.1　探求主題：「仏性」 37

2.1.1「仏性」テクスト 38

2.1.2「仏性」解釈の変更―― 潜性から顕性へ 41

2.2　探求方法論：「平常心」 42

2.2.1「平常心」テクスト 43

2.2.2　中道 46

2.3　学問の棄却 55

2.3.1　学問の否定 56

2.3.2「即心是仏」 50

2.4　学習の棄却 55

2.4.1　頓悟 56

2.4.2　修行不成立 58

3　学校の保守 63

3.0　要旨 64

3.1　生業 66

3.1.1　生業う――欺瞞を引き受ける 67

3.2　合理化の論法 68

3.2.1「*至道無難 唯嫌揀択 纔有言語 是揀択*」 69

3.2.2「不立文字」 71

3.3　集団心理 73

3.3.1「至道」幻想共同体 74

4　欺瞞の力学 77

4.0　要旨 78

4.1　何を間違ったのか 81

4.1.1「正」を立てる――ことばの＜存在措定機能＞の罠 82

4.1.2　言語のなんたるかを知らない 84

4.2　反抗 86

4.2.1　軽蔑 87

4.2.2　ブーメラン 89

4.2.3　欺瞞 90

4.3　師 91

4.3.1　タイプ分け 92

4.3.2　欺瞞 93

4.3.3　煙に巻く 95

4.3.4　＜師に非ず＞をパフォーマンスする 99

4.4　退行・退化の相で固定 102

4.4.1　思わせぶり 103

4.4.2　なぞなぞごっこ 107

5　科学の時代の禅 111

5.0　要旨 112

5.1　禅の学術的意味：「思考類型」 115

5.1.1　科学：「自己組織的生成」観を以て自然探究 …… 116
5.1.2　禅：「空」観を以て自足自閉 …… 118
5.2　禅に惹かれる者たち——類型 …… 120
5.2.1　信仰 …… 121
5.2.2　知的退行 …… 121
5.2.3　ホーリズムへの退行 …… 124
5.2.4　スピリチュアリズム …… 128
5.2.5　勘違い …… 129
6　閉じ 131
6.1　おわりに …… 132

0　導入

0.1　はじめに

0.2　予備知識

0.1　はじめに

「*シーザーを理解するためにシーザーである必要はない*」
実際は，「シーザーはシーザーを理解できない」「シーザーを理解するためにはシーザーであってはならない」である。
そこで，これまで禅とは無縁できたことを立場の利として，禅とは何かを論じてみるとする。

禅とは何かを論じようとする理由は，二つである。
一つは，「禅を借りて，ダブルバインド型自己欺瞞の系力学を同定しておこう」である。

なぜ特に禅なのか。
禅は，何か高次のものとひとから思われている。
しかしその本質は，＜自己欺瞞＞であり，自己欺瞞を至道に見せかける＜詐欺＞である。
そしてこのおおもとは，＜愚昧＞である。
このギャップが，よいである。

ひとは，愚昧・欺瞞を＜崇高＞に転じる。
愚昧・欺瞞と＜崇高＞は同じなのである。
実際，理知は＜崇高＞にはならない。
なぜか。
理知は，ひとを疎外するからである。

禅はひとのこの疎外感につけ込むふうになる。

ひとは，禅をありがたいものにする。

禅とは何かを論じようとする理由のもう一つは，「禅がこのような系であることを論ずるテクストが存在しないから」である。

巷の禅論考のテクストは，《禅から真理の示唆をもらう》を構えにしたものばかりある。
実際は，禅は＜真理＞とは無縁のものである。
禅は，＜探求＞を自ら閉ざし，そのことで己を＜真理＞とは無縁のものにしてしまう。――これが禅である。

以下，禅とは何かを，要約して述べておく。

禅は，己をダブルバインドの体（てい）にする論法をつくる。
「不立文字」である。
これは，生活から＜企て＞を排除する論に進む。
「平常心」が「不立文字」の実践形になる。
こうして，禅は反理知が立場になる。

一方，禅とは禅学校のことである。
この学校は，「不立文字」「平常心」が立場になるので，教えるものを持たず，アウトプットを持たない。
学校として成立しない学校である。
これを無理矢理成立させようとする。
無理矢理であるから，欺瞞である。

実際行動すれば，詐欺である。

詐欺のパフォーマンスは，＜思わせぶり＞である。
技術は，＜煙に巻く＞である。
禅とは，この営みのことである。

ダブルバインド型の自縄自縛，自己欺瞞は，ふつうのことである。
実際，社会で生きるとは，ダブルバインド型の自縄自縛，自己欺瞞を生きるということである。
自給自足生活と社会生活の違いはここにある。

ダブルバインド型の自縄自縛，自己欺瞞の思弁は，系進化する。
進化のダイナミクスは＜自己組織化＞であり，その系は詐欺の系である。

禅は，＜反理知＞で自縄自縛する。
自縄自縛は，《理知で反理知をする》というダブルバインドの自縄自縛である。
禅は，自身の立て方を間違ったのである。

系の力学は不可逆である。
このダブルバインドの系は，自己組織化する。

禅教団は，「集団心理」のダイナミクスで，理性を麻痺させる。
教団は，惰性を身につける。

また，教団の指導部は，教団経営に関心をもつものになる。
彼らは，もともと既成理知集団に対抗心をもつ者であり，対抗の形は既成を退けて自分がのし上がることである。
よって，その機会が得られればこれを択る。
こうして，世俗権力との利害の符合によって権力の中に入っていく，ということにもなる。

0.2　予備知識

0.2.1 「*色即是空空即是色*」の存在論
0.2.2 「*涅槃*」の宗教
0.2.3 「生活」の意味
0.2.4　思想と科学
0.2.5 ＜開祖・教団＞の進化法則
0.2.6 「*破邪顕正*」
0.2.7　アヴァンギャルド

0.2.1 「*色即是空空即是色*」の存在論

仏教の核は，「*色即是空空即是色*」の存在論である。
「*色即是空空即是色*」の意味は，「存在は有かつ空」である。

「有かつ空」は ,「非有かつ非空」である。
なぜなら，「有」は「有かつ空」ではないから，「有かつ空」であるものは非有である。「空」は「有かつ空」ではないから，「有かつ空」であるものは非空である。

「有かつ空・非有かつ非空」は，観念論ではなく，物理である。
物理的存在は，＜個ー系＞の階層構造をもつ。（→『「系ー個」存在論』）
この構造は，《個を現せば系が消え，系を現せば個が消える》という構造である。
例えば，波。
これは，《粒子を現せば波が消え，波を現せば粒子が消える》になる。
そして，万物がこのようである。

仏教者は，「*色即是空空即是色*」を理解できなかった。
「階層」の考えを持たなかったので，有と空が矛盾関係になった。
そして，矛盾を無理矢理飲み込もうとする。

矛盾は，飲み込めない。
実際には，一方を真とし他方を偽とすることになる。
仏教は，空を主にして有を幻想として扱うことになる。
これを「空観」という。

道元の「有時」(『正法眼蔵』) は，有を空と整合させようとした哲学的探求である。 ——結果としては，荒唐無稽な論となった。
(→『道元：「現成公案」「有時」』)

さらに，これに「方便」論を重ねる一派も現れる。
即ち，空と有を「衆生は空を解できないから，方便として有を説く」のように使い分ける。
識者には空，衆生には有，というわけである。

「空観」は，有の無視である。
仏教は，空を観ずれば有から脱けられると考えた。
これは，「重力の法則を観ずれば重力から脱けられる」の類の，おっちょこちょいの考えである。
頭は空を観じても，体は有に属したままなのである。
実際，出家とは，「頭は空を観じ，体は在家者 (生産者) に寄生」のことである。

ブッダは，＜救い＞を＜気持ちが少しラクになる＞程度に措いた。
自分の苦の理由がわかれば，苦を抱えることに少し我慢ができるようになる——少しラクになる，という程度である。
しかし，後から来る者は，これを＜絶対的救い＞にしなければと思う者になる。
そして「あの世」とかのフィクションをつくっていくことになるわけである——大乗経典。

0.2.2 「*涅槃*」の宗教

「*色即是空空即是色*」の『般若心経』は，前半が存在論，後半の前半分が実践論，そして残りが宗教 (信仰宣言) という構成になっている。
存在論は，「色即是空空即是色」。
実践論は，「般若波羅蜜多」に「依」り「無圭礙」になって「究竟涅槃」。
信仰宣言は，「般若波羅蜜多　是　大神咒 ‥‥ 能除　一切苦　真實　不虚」。

仏教は，存在論のみを見る限り，思想ないし哲学である。
仏教は，存在論から → 実践論 → 信仰宣言 の二段跳びで宗教になる。
跳躍は，文字通り跳躍であり，没論理である。

ブッダの時は，宗教というものではない。
跳躍は，教団が大きくしていくものである。
そして，「大乗」になって，宗教が確定する。

実際, 仏教最初期に編纂された最古の仏典ということになっている『スッタニパータ』では，主調になっている「真理を知る → 解脱 → 平安の境地」は，手の届くレベルのものである。 ——そもそも，手の届かないものであれば，教えにはならない。

宗教の秘訣は，これを手の届かないものにすることである。
手の届かないものにすることによって，僧・教団という特権的地位・組織が立てられるようになる。

かくして，「真理を知る → 解脱 → 平安の境地」は，つぎのような途方も無いもの (荒唐無稽) にされていく：

『大智度論』巻 32

菩薩摩訶薩　欲知　一切諸法　如　法性　實際，
當　學　般若波羅蜜。‥‥
菩薩摩訶薩　應　如是　住　般若波羅蜜。

菩薩摩訶薩は，一切の諸法の如，法性，実際を知らんと欲せば，
まさに般若波羅蜜を学ぶべし。‥‥
菩薩摩訶薩は，まさに是の如く般若波羅蜜に住すべし。

諸法實相中　三世　等一　無異。‥‥
過去如　未來如　現在如　如來如　一如　無有異。

諸法の実相中にては，三世 [過去・未来・現在] は等しく一にして異なる無し。‥‥
過去の如，未来の如，現在の如，如来の如は，一つの如にして異なる有ること無し。

法性者　法名　涅槃。
不可壞　不可戲論。
法性　名為　本分種。
如　黃石中有金性　白石中有銀性。
如是　一切世間法中　皆有　涅槃性。

法性なる者は，法を涅槃と名づく
壊すべからず，戯論すべからず。
法性は，名づけて本分の種と為す。
黄石中に金の性が有り，白石中に銀の性が有るが如し。
この如く，一切の世間の法中には皆涅槃の性有り。

一切總相　別相　皆歸　法性，同為　一相。
是　名　法性。‥‥
智慧　分別　推求　已，到　如中，從　如　入　自性。
如本末　生，　滅　諸戲論。
是　名為　法性。

一切の総相，別相は，皆法性に歸し，同じく一相と為る。
是れを法性と名づく。‥‥
智慧の分別･推求が已み，如の中に到り，如に從りて自性に入る。
如の本末が生じ，諸の戯論が滅す。
是を名づけて法性と為す。

[菩薩] 知　諸法實相中　無有　常法，無有　樂法，無有　我法，
無有　實法。
亦　捨　是觀法。
如是　等一切觀法　皆滅。
是為　諸法　實如涅槃　不生不滅，如本末　生。

[菩薩は] 諸法の実相中には　常法の有ること無く，楽法の有

ること無く，我法の有ること無く，実法の有ること無し，を知る。
また是の観法を捨てる。
是の如くして，等しく一切の観法が皆滅す。
是れ，諸法の実に涅槃の如く不生不滅にして，如の本末の生ずるを，為す。

0.2.3 「生活」の意味

「生活」の意味は，各種生物の営みがこれを示す。

いまの生物は，一つの生命体に溯る。
生物の歴史は，生物の進化史である。
そしてこの中で続いてきたものは，「生命」の意味の継承である。

「生命」の意味は単純であり，それは「自己増殖」――＜自分のクローンをつくる＞――である。
生物のいまがあるのは，＜自分のクローンをつくる＞が継がれてきたからである。

「生活」の意味は，「＜自分のクローンをつくる＞への到達のためにする営み」である。
ミノムシはミノガの幼虫のことであるが，蛾の形になるのは雄の方である。
雌は，イモムシの形のまま蓑の中に棲む。
そして，雄がやってきて，生殖が成り，＜自分のクローンをつくる＞が果たされる。
われわれの感覚からすると，自分の DNA を残すだけの何とも味気ない一生のように思えるが，これが生物というものであり，生活というものである。

＜自分のクローンをつくる＞は，利己行為である。

よって，個は互いに争うことになる。
＜自分のクローンをつくる＞においては，可能なことはすべて許される。
生物は，利己で生きる存在であり，可能なことはすべて己に許す存在である。

そこで，生物に「救い」を考えることはナンセンスである。
人間も同じである。
「救い」とは，宗教のように根底的に考えるものではない。
根底的に考えれば，自家撞着する。
「救い」とは，プラグマティックに考えるものである。

> 実際，宗教の意義は，「救い」ではなく，「治安」――「良民をつくる」――である。
> 今日，道徳教育が学校教育 (含 : 大学) の必修になっているのは，「良民をつくる」を担当するところが無くなったからである。

0.2.4　思想と科学

思想は，個的な営みである。

個的な営みは，類型が出揃う。
思想は，類型が出揃っている。
新作のつもりでいるのは，類型が出揃っていることを知らないだけである。

個が集まっても，蜂の巣の幼虫のように居るのであれば，個と変わらない。
禅の道場は，これである。

個的な営みである思想は，＜先祖還り＞をループする。
禅の謂う「仏性」は，先祖還りである。
それは, ブッダより前のバラモン教への先祖還りである (「ブラフマン」)。
この先祖返りを以て，禅はブッダの仕事を元の木阿弥にする。

科学は，分業である。
今日の科学は，「メートル」単位で「ニュートリノ」の 10-18 から「宇宙」の 1027 までのスケールの存在論を構築しているが，これは分業のなせるわざである。

思想の前進は，＜科学に回収＞という形で成る。
一方，思想のモーメントは，個の疎外感である。

そしてその疎外は，たいてい科学からの疎外である。
この疎外感が紡ぐ思想は,「科学万能の風潮」を批判するという形をとる。
社会の風潮は「科学万能の風潮」ではないが，反科学が自分の立つ瀬である思想は，社会の風潮を「科学万能の風潮」にしなければならないのである。

「科学万能」批判の思想は，同類を得て自らを元気づける。
そして，彼らが元気を得るものの一つに，禅がある。
禅も，彼らがいるからいまがある。

0.2.5　＜開祖・教団＞の進化法則

ブッダとは，「色即是空・空即是色」「諸行無常」の存在論を＜悟り＞とした歴史上の人物に与えられた称号である。
ブッダの意味は，これ以上でも以下でもない。
「色即是空・空即是色」「諸行無常」の存在論を＜悟り＞とする――これが , ブッダの意義である。

「色即是空・空即是色」「諸行無常」は，観念論ではなく，物理である。
実際，いまの時代には，アタリマエとなるものである。科学は，存在を「色即是空・空即是色」「諸行無常」として現す。

ブッダは，煩悩からの解脱の方法論を求め，この存在論に至り，これをソルーションとした。
《これがソルーションである》のロジックは：

> 《苦は，煩悩であり，それは執着から生ずる。
> 執着しているものは，実体がない。あるいは，無常である。
> 執着しているものに実体がないこと，無常であることがわかれば，
> 執着は無くなる。 よって，苦から脱けられる。》

執着は《執着しているものの空・無常がわかれば執着が無くなる》というものではないが，ブッダは「無くなる」と考えた / 考えることにした (仮説)。

ブッダは，この成果をひとに説いてまわる (仮説検証)。
これにより，ブッダを囲む勉強会が組織されていくことになる。

ブッダを囲む会は，ブッダを師にする教団に変質する。
―― 一般に，勉強会は，教団に変質する。
員の間には，＜中央・周辺＞の格差が形成され，＜先輩・後輩＞および＜優・劣＞の階層が形成される。
このダイナミクスにより，師は一般員から隔たった存在になる。
そしてこれは，師が偉い存在になるということである。
そして開祖が死ぬと，教団のダイナミクスは，開祖の神格化に進む。

教団の中から，実践的に師のあとを継ごうとする動きが起こってくる。
「大乗」ムーブメントである。

「大乗」は，どんなふうになるか？
「色即是空・空即是色」「諸行無常」の存在論は，一般大衆に伝わるものではない。
そして，一般大衆とは，こんな存在論で救われるような存在ではない。
しかし，布教者は＜救済者＞の立場をとってしまったので，引っ込みがつかない。
そこで，救済のための方便を用いる。
救済仏を立て，「*死んだら極楽に行くよ*」「*称名念仏の他は要らないよ*」の虚言を使うようになる。

大乗教団は，様々な信仰アイテムの開発に邁進する。
特に重要なカテゴリーに，二つある。
一つが，「仏像」である。
そしてもう一つが，「お経」である――「大乗経典」。

大乗経典は，救済仏ストーリーの創作であり，フィクションである。
しかし流通していく過程で，事実の記録というものになっていく。

方便は成功する。
大衆はそれをありがたがる。
しかしこの成功により，教団はますます引っ込みがつかなくなる。
大衆がありがたがるように，己を荘厳に装飾していく。
これが循環運動する。
こうして教団は，自身を「あの世」商売に成していく。
「色即是空・空即是色」「諸行無常」の＜悟り＞とは無縁のものになっていく。

救済の方便「*死んだら極楽に行くよ*」「*称名念仏の他は要らないよ*」は，騙しである。
経も仏像も騙しである。
しかし，やってしまっているからには，これを本当にしなければならない。
そして，欺瞞を意識したら教団はやれない。
自己欺瞞の意識は，抑圧・遮断しなければならない。
こうして，教団は，自己欺瞞の意識を抑圧・遮断する装置を開発するところとなる。
その装置は，「修行」である。

「修行」の内容は，苦行である。
苦行の機能は，＜洗脳＞である。
苦行は＜悟り＞とは何の関係もない。

＜悟り＞に至るための実践は，科学である。
苦行は，科学の真逆を行くものである。

アスリートは，自信をもてるために苛酷な練習を積む。
修行僧の苦行は，これと同じである。
ただしこの場合は，根拠の無い自信をもつために，苦行するのである。

そして「修行」は，一石二鳥の効果をもつ。
洗脳と合わせて得られるものは，大衆からの支持である。
ひとは，苦行者を見ると，これを応援し，さらに尊敬するようになる。
苦行がすごいほど尊敬の度合いは高まり，その苦行者に手を合わせ拝むようになるのである。

教団はかように進化する。
この進化のかたちは，必然である。
そもそものスタートは，「色即是空・空即是色」「諸行無常」の存在論であった。
これが，「あの世」商売へと変わっていくのである。
そして今日の「あの世」産業に至っているわけである。

ただし，「あの世」産業も，諸行無常である。
今日の「あの世」産業は，科学の常識と比べられる格好になる。
信仰を土台にしたものでは，いられない。

比叡山では最澄が今も生きていて，毎日配膳される飯を食し，少し開けられた障子の隙間を通って堂の中に入る。

本来なら荒唐無稽となるべきこの話は，逆に，ありがたい話になる。
ひとは，死んだ人のことを偲んでひとと語るとき，「いまはあの世で‥‥」のような言い方をふつうにする。
なぜか。
ひとは，ここは科学的知識を介入させてはならない領域――即ち，ファンタジー・ゲームの領域――だ，という弁えをするのである。
科学の時代の「あの世」産業は，ひとのこの＜分別＞によって保つ，というふうになる。

以上の流れは必然であるが，この大きな流れは小さな分岐を処々に含む流れである。
禅は，教学を批判するムーブメントとしておこる。

『臨済録』「示衆」

三乗十二分教　皆是　拭不淨故紙，
佛　是　幻化身，
祖　是　老比丘。

「不淨を拭う故紙」＝トイレットペーパー

しかし，系の力学により，大きな流れの中に結局は収まっていく。

0.2.6 「*破邪顕正*」

教育は思考を論理的・生産的にしようとするが，人は変わるものではない。
人の思考スタイルは多様であり，そして簡単に退行する。

仏教の特徴的な論法に，「破邪顕正」がある。
この論法は，退行である。
即ち，「*色即是空空即是色*」を肯定的に説明できなくて逃げ込んだのが，「破邪顕正」である。

「破邪顕正」の意は，「破邪即顕正」――「邪を破ることが，即ち正を顕すこと」――である(註)：

凝然『八宗綱要』「三論宗・破邪顕正」

破邪之外　無　別顯正。
破邪已盡　無　有所得。
所得既無、言慮　無寄

破邪の外、別の顕正なし。
破邪すでに尽くれば、所得の有ることなし。
所得すでに無ければ、言慮の寄ることなし

「破邪即顕正」は，言うまでもなく，虚偽である。
実際，邪の否定から正が顕れないことは，論理のいろはである。

「これは２だ」を邪とし，「２ではない」と言う。
「２ではない」は，何の数も指さない。

特に，「破邪即顕正」の言を用いて人を信用させれば，それは詐欺である。

「イデオロギー」は，「破邪即顕正」が流儀である。
野党は＜批判･文句ばっかり＞になるのが定めであり，大衆やマスメディアは＜批判・文句ばっかり＞を自分の役割にしていく。 これも「破邪即顕正」である。
実際，「破邪即顕正」は，ひとのふつうの思考スタイルである。
なぜなら，「破邪即顕正」は＜肯定的な定言を立てられない者＞のやることであるが，ひとはだれしも＜肯定的な定言を立てられない者＞だからである。

「破邪即顕正」の思考スタイルは，＜構築＞の思考法と対立していることになる。
＜構築＞の思考法の例は，科学である。
学校教育は科学（自然および人文）の教育になっているが，それは学校教育が＜構築＞志向――生産者養成――で立てられているためである。

禅の「不立文字」は，「破邪即顕正」の類である。
「不立文字」を立てながら，「こうではない」を言うことにおいては饒舌である。

禅の師は，「不立文字」の合理化を必要とする者である。
師は，授業する者であり，しかし肯定的な定言を立てられない者である。

ここで「不立文字」が使える。
否定的なことしか言えないが，それで授業成立となってくれる。

学校教育は＜構築＞志向から科学の教育として設計されているが，「科学的」の意味が曖昧になる分野は「不立文字」に嵌まる危険がある。
よって，禅の「不立文字」教育の様を知っておくことは，「温故知新」の意味で，教育学的意義がある。

註：「破邪即顕正」は，『三論玄義』の「破邪顕正」がこれであるように解説されることがある。
しかし,『三論玄義』の「破邪顕正」は, まだ段階論である――「破邪即顕正」の意味に解するのは無理である：

吉蔵『三論玄義』

初門　有　二
一　破邪
二　顕正

初門に二あり
一に破邪
二に顕正

破邪　則　下　拯　沈淪,
顯正　則　上　弘　大法。

破邪は則ち下に沈淪を拯 (すく) い、
顯正は則ち上に大法を弘む。

0.2.7　アヴァンギャルド

持たない者の処世法に，＜持っているように見せかける＞がある。
思想シーンでは，流行りのようにこれが現れる。
これの一般的名称は「アヴァンギャルド」である。
「現代○○」と名乗って登場してくるのはこの類である。
近くには――といっても，既にずいぶん前のこととなったが――「ポストモダン」なるものがあった。

この流行りに乗ってくるのは，若い者である。
若い者は持たない者だからである。

＜持っているように見せかける＞の方法は，＜思わせぶりな物言いをする＞である。
これはペテンであるが，＜自分で自分を騙す＞というところが，要点である。
当人は，《自分は何かを将につかまえんとしているのだ》と思い込もうとする。
そして，その何かのゲットを当て込み，自分はそれを持っているという思わせぶりをするのである：

Elle est retrouvée.
Quoi ? — L'Éternité.
C'est la mer allée
Avec le soleil

持たない者が持つ者になろうとするとき，本来行うことは「学」である。
＜持っているように見せかける＞を用いる者は，「学」に疎外されている者である。
ひとは，自分を疎外しているものに対し，仕返ししたいと思う。
＜持っているように見せかける＞を用いる者は,「学」への仕返しとして，＜持っているように見せかける＞をするのである。

＜持っているように見せかける＞は，いつまでも続かない。
当人が，この欺瞞に飽きてくる。
これを続ける者は，引っ込みがつかなくなった者である。

一方，「学」に疎外される者は，つねに生産される。
よって，前回のアヴァンギャルドが世代忘却される頃に，アヴァンギャルドが再びおこる。

アヴァンギャルドは，＜思わせぶり＞詐欺といったものであるが，＜思わせぶり＞詐欺の形で主題化されることがない。
ひとは，アヴァンギャルドに取り込まれるからである。
即ち，アヴァンギャルドを前にすると，自分を遅れている者にしてしまう。
そして，アヴァンギャルドを理解する者を装うのである。

「思想がわかる」には，「＜思わせぶり＞詐欺がわかる」が含まれる。
＜思わせぶり＞詐欺がわからないでは，思想はわからない。

巷には，「禅とは何か」のタイトルの論考があふれている。

本論考の「禅とは何か」は，それらとは違うものである。
本論考は，禅の＜思わせぶり＞詐欺の面を見ようとする。

禅の「不立文字」は，ただの思わせぶりであり，詐欺である。
この詐欺行為は，引っ込みがつかない。
禅は，＜思わせぶり＞詐欺が引っ込みがつかなくなるときの形を，見せてくれる。

禅が見せてくれるものは,「正」のことばにミスリードされ,「不立文字」「*至道無難 唯嫌揀択 纔有言語 是揀択*」「*平常心*」を唱えて自縄自縛になる者たちの様である。
本論考は，興味深い生物種を観察するように，「禅」の者たちの様を観察しようとする。

1　学校の創設

1.1　禅の事業カテゴリー : 学校

1.2　無内容で当て込み発進

1.1　禅の事業カテゴリー：学校

「*禅とは何か*」は，どんな問いか。
先ず，この問いの意味をわかっていなければならない。

禅の事業カテゴリーは，学校である。
道場・寺院は，学校 (学生寮付き) である。

学校は，教授・学習の場である。
学校は，つぎの観点で評価する：

(1) 教授・学習内容
(2) 教授法
(3) アウトプット

「*禅とは何か*」は，「*禅学校の教授・学習内容，教授法，アウトプットはどのようか*」である。――これ以上でも以下でもない。

1.2　無内容で当て込み発進

禅学校創設の理念は，「正道」をやることである。
禅学校は「正道」を以て，己を他と差別化しようとする。

この「正道」は，「探求していくうちにわかるだろう」の当て込みで立てられる。
そして，学校を開始する。
「正道」を不明にしたまま，学校が開始されるわけである。

一般に，内容の当て込み発進は，ダメというものではない。
《走りながら考え，そして中身をつくっていく》はよくあることであり，そしてうまくいくこともある。
しかし，禅の場合は，破綻が最初から決まっている。
「中身をつくる」は，禅の立場――方法論――と合わないからである。
禅の立場では，つくったらそれは誤りなのである。

禅学校が当て込む「正道」というものは，無い。
そして，この学校は授業内容を持てない。
この学校は，教えるものを持たず，ゴールを持たない学校である。
空っぽの学校である。

空っぽの学校は，どうやったら学校を保てるか。
欺瞞で乗り切るのみである。
要するに，詐欺である。

企業詐欺の多くは，詐欺をしようとしてしたのではない。
それは，当て込みが失敗し，しかしその間に自分を引っ込みがつかない立場にしてしまい，よって詐欺でつないでいくようになる，というものである。
禅学校は，この場合である。

2　学の棄却

2.0　要旨
2.1　探求主題：「仏性」
2.2　探求方法論：「平常心」
2.3　学問の棄却
2.4　学習の棄却

2.0　要旨

禅ムーブメントには，原点回帰の意志がある。
禅の場合，回帰の先は，空観である。

空観は，人為に対する空観から始まり，事象全般に対する空観へと進展したものである。

人為に対する空観は，人為の棄却になる。
どの行為も，意味づかないからである。

学は，人為である。
禅は，己の主義から，学を立たられないものになる。

2.1　探求主題：「仏性」

2.1.1 「仏性」テクスト
2.1.2 「仏性」解釈の変更―― 潜性から顕性へ

2.1.1「仏性」テクスト

「学を立てる」の意味は，「探求主題を立てる」である。
禅の探求主題は，「仏性」である。

学と宗教では，「仏性」の論じ方が違う。

宗教が「仏性」を論ずるとき，「仏性」はわかっているものである。
僧は，説法を以て衆生を救うことが役割である。
そして，「説法を以て衆生を救う」には「仏性をわかっている者として振る舞う」が含意される。

一方，学が「仏性」を論ずるとき，「仏性」は探求の対象であり，不明のものである。
禅は，宗教ではなく，学である。
禅僧が衆生と関係をもつ形は，「托鉢」であり，「説法を以て衆生を救う」ではない。

> では，禅はなぜ宗教になるのか。
> ひとは，何かをありがたがるという形によっても，救われるものだからである。
> 禅僧は，衆生からありがたがられる存在になることで，衆生を救っていることになる。
> そしてこの場合は，俗世と交わらない存在然としているのがよいのである。

「仏性」は，不明である。――実際，それはことばに過ぎない。
しかし，禅の師は，「仏性」をわかっている者としてパフォーマンスしなければならない。
パフォーマンスの形は，「煙に巻く」である：

『趙州録』

> 問、　祖仏近不得底、是　什麽人？
> 師云、不是　祖仏。
> 学云、争奈＜近不得＞何。
> 師云、向你道「不是祖仏　不是衆生　不是物」，得麽？
> 学云、是　什麽？
> 師云、若有名字、即是「祖仏・衆生」也。
> 学云、不可　只与麽　去也。
> 師云、卒未　与你　去在。
>
> 問う、「祖仏の近づき得ざる底、是れ什麽人 (なんびと) か？」
> 師云く、「祖仏ならず。」
> 学云く、「＜近づき得ざる＞を争 (いかで) か奈何 (いかん) せん。」
> 師云く、「你に向いて道 (い) う『祖仏ならず、衆生ならず、物ならず』。得たか？」
> 学云く、「是れ什麽 (なん) ぞ？」
> 師云く、「若し名字有らば、即ち「祖仏・衆生」なり。」
> 学云く、「只だ与麽にて去るべからず。」
> 師云く、「卒 (つい) に未だ你と与 (とも) にし去らず。」

「祖仏も近づくことのできない底，それは何者ですか。」
「祖仏ではない。」
「＜近づくことができない＞なら、どうしようもない。」
「あんたには『祖仏でない、衆生でない、物でない』と言おう。わかった？」
「それは何ですか。」
「もし名前があれば、即ち「祖仏・衆生」だね。」
「そんなんじゃあ済みませんよ。」
「まだまだ，あんたとは済まないね。」

2.1.2「仏性」解釈の変更―― 潜性から顕性へ

大乗仏教は，仏の教えによって衆生を成仏に導くという企図である。
この企図は，＜仏の教えによって成仏に導かれる＞を，衆生の属性として立てていることになる。
実際，この属性を「仏性」と呼ぶ。
こうして，「一切衆生悉有仏性」が，大乗仏教の標語になる。

しかし，《仏の教えによって衆生を成仏に導く》をいざ実践に移そうとすると，「*自分にそのようなことはできるか？*――いや，できない」になる。
では，衆生は成仏できないのかとなると，これも困る。
さて，どうするか。

ソルーションは，《衆生はもともと成仏している》にすることである。
こうして，「仏性」の意味が変更されることになる。
「仏になる可能性」から「仏の顕在」への意味変更――潜性から顕性への意味変更――である。

しかしそうすると，「仏性」を衆生に限定することに，意味がなくなる。
動物でもいいじゃないか，となる。
さらに，生き物全般でもいいじゃないか，となる。
そして，ついには「山川草木悉有仏性」を言わねばならなくなる。

ここに「仏」は，「事物のイデア」といったものになる。
そして「現成」が，「仏性」の意味になる。

2.2　探求方法論：「平常心」

2.2.1「平常心」テクスト
2.2.2　中道

2.2.1「平常心」テクスト

学は，主題探究の中で，方法論を固めていく。
禅は，空観の含意になる「無為」で自縄自縛する。
よって，禅の方法論は「無為」の他は無い。

しかし，自分が存在していることは，行為していることであり，企図していることである。
それらの行為・企図は，「無為」であるとしなければならない。
どうするか。
それらを「平常」と位置づける。
こうして，禅の方法論は「平常心」になる：

『趙州録』

師　問　南泉、如何是　道。
泉云、平常心　是。
師云、還　可　趣向　不。
泉云、擬　即　乖。
師云、不擬、争知　是　道。
泉云、道　不属　知不知。
　　知　是　妄覚、不知　是　無記。
　　若　真達　不擬之道、猶　如　太虚、廓然蕩豁。
　　豈可強　是非　也。
師於言下、頓悟玄旨、心如朗月。

師、南泉に問う、「如何なるか是れ道。」

泉云く、「平常心是れ。」
師云く、「還 [ま] た趣向すべきや。」
泉云く、「擬すれば，即ち乖 [そむ] く。」
師云く、「擬せずんば、争 [いか] でか是れ道なることを知らん。」
泉云く、「道は知・不知に属せず。
　　知は是れ妄覚、不知は是れ無記。
　　若し真に不擬の道に達せば、猶お太虚の如く、廓然蕩豁たり。
　　豈に強いて是非すべけんや。」
師、言下に玄旨を頓悟し、心、朗月の如し。

師 (趙州) が南泉にたずねた、「道とはどんなものですか。」
「平常心がそれだ。」
「さらに目標を立てるべきですか。」
「思案が入ると、外してしまうぞ。」
「思案しないで，どうしてそれが道だと知れましょうや。」
「道は，＜知る・知らない＞というものではない。
＜知る＞は妄覚、＜知らない＞は無記だ。
もしほんとうに思案の入らない道に達したら、
もう太虚のごとしであって、廓然蕩豁だ。
是非を入り込ませるところはない。」
師は，言下に玄旨を頓悟して、心，明月の如しであった。

「平常」を立てるのは，もちろん，ご都合主義である。
しかしこのご都合主義は，どうしようもないものである。

即ち，禅は，空観の含意になる「無為」で自縄自縛になる。
観念の無為と現実の有為のダブルバインドになる。
「平常」のご都合主義は，禅の因果というものである。

2.2.2　中道

「平常心」は，自家撞着する。
「平常心」で自分を他から差別化しようとすることは，自己欺瞞をやるようになることである。

一般に，規律や主義は，０か１でやると自家撞着になる。
規律や主義は，自縄自縛である。
そして，自家撞着を自縄自縛にすると，欺瞞になる。

そこで，規律や主義の要諦は，「テキトー」である。
格調高く言えば，「中道」である。

「テキトー」は，「破壊」と通じる。
「テキトー」を主義にする僧は，破戒僧である。
――キリスト教だと，天使に対する堕天使である。
高名な禅僧の伝記は，彼らの＜欺瞞とテキトーのまぜこぜ＞の伝記である。

2.3　学問の棄却

2.3.1　学問の否定
2.3.2「即心是仏」

2.3.1　学問の否定

仏教は，空観である。
空観は，学の向かうところを無くす。
そして，学の構築において要素となる概念をすべて却けることになる。
こうして，学は立たなくなる。

『臨済録』「示衆」

世出世諸法、皆　無　自性、亦無　生性。
但有　空名、名字　亦　空。
你　秖麼　認　他閑名　爲　實。
大錯了也。
設有、皆是　依變之境。
有箇　菩提依、涅槃依、解脱依、三身依、境智依、菩薩依、佛依
你　向　依變國土中、覓　什麼物。
乃至　三乘十二分教、皆是　拭不淨故紙。
佛　是　幻化身、祖　是　老比丘。
你　還是　娘生　已否。
你　若　求佛、即　被　佛魔　攝。
你　若　求祖、即　被　祖魔　縛。
你　若　有求　皆苦。
不如　無事。

世 [世俗]・出世の諸法は、皆な自性無く、亦た生性無し。
但だ空名有るのみ、名字も亦た空なり。
你 [なんじ] は祇麼 [ひたす] ら他 [か] の閑名を認めて実と為す。
大いに錯了 [あやまれり]。
設 [たと] い有るも、皆な是れ依変の境なり。
菩提依、涅槃依、解脱依、三身依、境智依、菩薩依、仏依有り。
汝は依変国土の中に向いて、什麼 [なに] 物をか覓 [もと] む。
乃至 [ないし] 三教十二分教も、皆な是れ不浄を拭う故紙 (註) なり。
仏は是れ幻化の身、祖は是れ老比丘。
汝は還 [は] た是れ娘生なりや。
汝若し仏を求むれば、仏魔に摂せられん。
汝若し祖を求むれば、祖魔に縛せられん。
汝若し求むること有れば、皆な苦なり。
無事に如かず。

「拭不淨故紙」: トイレットペーパー

2.3.2 「即心是仏」

経の内容は，荒唐無稽である。
ありがたがる気持ちが無ければ，読めないものである。
禅の傑人たちは，経をくだらないと断ずる者である。

なおのこと偶像は，彼らにとってくだらないものである。
彼らは，偶像を拝むことはしない。

彼らは，ブッダをはじめ先人を，所詮人――自分と変わらない――と見る者である。
彼らは，ブッダを「等身大のブッダ」で考える者である。

そこで，彼らにとって「成仏」は，専ら自分を頼みにして実現するところのものになる。
これは，ブッダそのものを実践するということである。
ブッダは，自分の外(そと)のものではない。
ブッダは，自分である。

「即心是仏」は，この構えを表現していることばである。
「即心是仏」の「心」は，「自分」である。

『臨済録』「示衆」

> 如今　學者不得、
> 病在　甚　處。
> 病在　不自信　處。
> 你　若　自信不及、即便　忙忙地　徇一切境轉、被他萬境回換、不得自由。
> 你　若　能歇得　念念馳求心、便　與祖佛　不別。
> 你　欲得識　祖佛　麼？
> 秖　你　面前聽法底。
> 是學人　信不及、便　向外　馳求。
> 設　求得　者、皆是　文字勝相、終不得　他　活祖意。
> 莫錯、諸禪徳。
> 此時不遇、萬劫千生、輪回　三界、徇好境　掇去、驢牛肚裏　生。
> 道流、約　山僧見處、與釋迦　不別。
> 今日多般用處、欠少　什麼。
> 六道神光　未曾　間歇。
> 若　能如是見得、秖是　一生無事人。

如今 [いま] の学者の得ざるは，
病は甚 [なん] の処にか在る。
病は，不自信の処に在り、
汝若し自信不及ならば、即便 [すなわ] ち忙忙地 [的] に一切の境にしたがって転じ、他 [か] の万境に回換せられて、自由を得ず。
汝若し能く念念馳求の心を歇得せば、便ち祖仏と別ならず。
汝は祖仏を識らんと欲得 [ほっ] するや。
祇 [た] だ　汝――[わが] 面前にて法底を聴く [汝] ――是れなり。
学人　信不及にして、便 [すなわ] ち外に向って馳求す。
設 [たと] い求め得る者も、皆な是れ文字の勝相にして、終 [つ

い] に他 [か] の＜活祖意＞を得ず。
錯 [あやま] ること莫れ、諸禅徳よ。
此の時遭 [あ] わずんば、万劫千生、三界に輪廻し、好境に徇 [したがっ] て掇去して、驢牛の肚裏に生ぜん。
道流 [きみたち] は、山僧 [わたし] の見処に約せば、釈迦と別ならず。
今日多般の用処　什麼 [なに] をか欠少す。
六道の神光、未だ曽って間歇せず。
若し能く是の如く見得せば、祇 [た] だ是れ一生無事の人なり」。

你　要　與祖佛　不別、但莫　外求。
你一念心上　清淨光、是　你屋裏　法身佛。
你一念心上　無分別光、是　你屋裏　報身佛。
你一念心上　無差別光、是　你屋裏　化身佛。
此　三種身　是　你　即今目前聽法底人。
祇爲不向外馳求、有此功用。
據　經論家、取　三種身　爲　極則。
約　山僧見處、不然。
此　三種身　是　名言、亦是　三種依。
古人云、身　依義　立、土　據體　論
法性身　法性土、明知　是　光影。

汝は祖仏と別ならざらんと要 [ほっ] せば、但だ外に求むること莫れ。
汝が一念心上の清浄光は、是れ汝が屋裏の法身仏なり。
汝が一念心上の無分別光は、是れ汝が屋裏の報身仏なり。

汝が一念心上の無差別光は、是れ汝が屋裏の化身仏なり。
此の三種の身は是れ汝――即ち今目前に法底を聴く人――なり。
祇 [た] だ外に向って馳求せざるが為に、此の功用あり。
経論家に拠らば、三種の身を取って極則と為す。
山僧 [わたし] の見処に約すれば、然らず。
この三種の身は是れ名言にして、亦た是れ三種の依なり。
古人云く、「身は義に依って立て、土は体に拠って論ず」と。
法性の身、法性の土、明らかに知んぬ、是れ光影なることを。

大徳、你且識取　弄光影底人、
是　諸佛之本源、一切處
是　道流歸舍處。
是　你四大色身　不解　説法聽法。
脾胃肝膽、不解　説法聽法。
虚空　不解　説法聽法。
是　什麼　解　説法聽法。
是　你　目前歴歴底、勿一箇形段　孤明、
是　這箇　解　説法聽法。
若如是見得、便　與祖佛　不別。
但一切時中　更莫間斷、觸目皆是。
祇　爲　情生　智隔、想變　體殊、所以　輪回三界　受種種苦。
若　約山僧見處、無　不甚深、無　不解脱。

大徳 [きみたち]、汝且 [しばら] く＜光影底を弄ぶ人＞を識取せよ。

是れ諸仏の本源、一切処
是れ道流 [きみたち] の帰舎の処なり。
是れ汝が四大色身は、説法聽法を解さず。
脾胃肝胆は，説法聽法を解さず。
虚空は，説法聽法を解さず。
是れ什麼 [なに] ものか　説法聽法を解す。
是れ汝――目前歴歴の底にして、一箇の形段も勿 [な] くして孤明なる [汝]
是れ這箇 [かくなるもの] が、説法聴法を解す。
若し是の如く見得すれば、便ち祖仏と別ならず。
但 [およ] そ一切時中、更に間断莫く、触目皆な是なり。
秖 [た] だ情生ずれば智隔たり、相変ずれば体殊 [こと] なるが為に、所以 [ゆえ] に三界に輪廻して、種々の苦を受く。
若し山僧 [わたし] の見処に約せば、甚深ならざるは無く、解脱せざるは無し。

2.4　学習の棄却

2.4.1　頓悟
2.4.2　修行不成立

2.4.1　頓悟

分析的・構成的方法を退けるとき，「正法」はどんなふうに得られるものということになるか。
ロジックとして，もっぱら「頓悟」の様で得られるものということになる。

『趙州録』

師　問　南泉、如何是　道。
泉云、平常心　是。
師云、還　可　趣向　不。
泉云、擬　即　乖。
師云、不擬、争知　是　道。
泉云、道　不属　知不知。
　　知　是　妄覚、不知　是　無記。
　　若　真達　不擬之道、猶　如　太虚、廓然蕩豁。
　　豈可強　是非　也。
師於言下、頓悟玄旨、心如朗月。

師、南泉に問う、「如何なるか是れ道。」
泉云く、「平常心是れ。」
師云く、「還 [ま] た趣向すべきや。」
泉云く、「擬すれば，即ち乖 [そむ] く。」
師云く、「擬せずんば、争 [いか] でか是れ道なることを知らん。」
泉云く、「道は知・不知に属せず。
　　知は是れ妄覚、不知は是れ無記。
　　若し真に不擬の道に達せば、猶お太虚の如く、廓然蕩豁。
　　豈に強いて是非すべけんや。」
師、言下に玄旨を頓悟し、心、朗月の如し。

師 (趙州) が南泉にたずねた、「道とはどんなものですか。」
「平常心がそれだ。」
「さらに目標を立てるべきですか。」
「思案が入ると、外してしまうぞ。」
「思案しないで，どうしてそれが道だと知れましょうや。」
「道は，＜知る・知らない＞というものではない。
＜知る＞は妄覚、＜知らない＞は無記だ。
もしほんとうに思案の入らない道に達したら、
もう太虚のごとしであって、廓然蕩豁だ。
是非を入り込ませるところはない。」
師は，言下に玄旨を頓悟して、心，明月の如しであった。

2.4.2　修行不成立

教団の師・運営部は，員に対し「修行」を定めねばならない。
「修行」を与えられなければ，員はすることが無くなるからである。
何をしてよいかわからず，困ってしまうからである。
一日は 24 時間であるから，24 時間が埋まるだけの＜務め＞を作為せねばならない。

このとき修行は ,「体裁の修行」である。
そして「体裁の修行」は，つぎのように退けられるものになる：

『景徳伝燈録』巻五「南嶽懐譲章」

唐先天二年　始往　衡嶽　居　般若寺
開元中　有　沙門　道一〈即馬祖大師也〉
住　伝法院　常日　坐禅
師知　是　法器，往問　曰
大徳　坐禅　図什麼
一曰　　図作仏
師乃　取一塼，於彼庵前石上　磨
一曰　　磨塼　作　什麼
師曰　　磨作　鏡
一曰　　磨塼　豈得成鏡耶
師曰　　磨塼　既不成鏡　坐禅　豈得成仏耶
一曰　　如何　即是
師曰　　如　牛駕車
　　車不行　打車即是　打牛即是
一　無対
師又曰　汝　為　学坐禅，為　学坐仏
　　若　学坐禅，禅　非坐臥
　　若　学坐仏，仏　非定相
　　於　無住法，不応　取捨
　　汝　若　坐仏，即是　殺仏
　　若　執　坐相，非　達其理
一　聞　示誨，如　欽醍醐

唐先天二年，始に衡嶽に往き，般若寺に居す。
開元中に，沙門の道一有り。
伝法院に住して、常日、坐禅す。
師、これ法器なるを知りて、往きて問うて曰く
「大徳、坐禅して什麼 [なに] をか図る」
一 [道一] 曰く「作仏を図る」
師乃ち一塼 [せん] を取りて、彼の庵前の石上に於いて磨く。
一曰く「塼を磨いて、什麼をか作す」
師曰く「磨いて鏡を作る」
一曰く「塼を磨いて、豈に鏡を成し得んや」
師曰く「塼を磨いて既に鏡成らず、坐禅して豈に仏に成るを得んや」
一曰く「如何せば即ち是 [ぜ] ならん」
師曰く「牛駕車の如く，車行かざれば、車を打つが即ち是，牛を打つが即ち是」
一、対 (こた) える無し。
師また曰く
「汝、坐禅を学ぶを為し、坐仏を学ぶを為す。

もし坐禅を学ばば、禅は坐臥にあらず。
もし坐仏を学ばば、仏は定相にあらず。
無住の法においては、取捨応ぜず。
汝、もし坐仏せば、即ちこれ仏を殺す。
もし坐相に執せば、その理に達するにあらず」
一、示誨を聞きて、醍醐を飲むがごとし。

師（南嶽懐譲）は，唐先天二年，始に衡嶽に往き，般若寺に居した。
開元中に，沙門の馬祖道一がいた。
伝法院に住み，毎日座禅をしていた。。
師は，馬祖が法器であることを知り，往って問うて言った：
「君は，座禅をして何をしようというのだ？」
「仏になろうとしてます。」
師は，塼（瓦の類）を取って，彼の庵前の石の上で磨きだした。
「塼を磨いて何をつくろうというのですか？」
「磨いて鏡にするのさ。」
「塼を磨いて鏡にはなるわけありませんよ。」
「塼を磨いて鏡にならないなら，座禅で仏になれるわけないだろう。」
「ではどうしたらよいのですか？」
「牛駕車のように，車が動かないときは，車を打ったり，牛を打ったりだ。」
道一は，返せない。
師は続けた：
「おまえがやっているのは，坐禅を学ぶ，坐仏を学ぶだ。

もし坐禅を学べば，禅は坐臥でなくなる。
もし坐仏を学べば，仏は定相でなくなる。
無住の法においては，取捨はないのだ。
おまえの坐仏は、仏を殺してしまう。
おまえの＜坐相をとらえる＞は、＜理に達する＞ではない」
道一は，教えを聞いて、醍醐を飲むがごとしであった。

このロジックにおいて，座禅は行為として成立しないことになる。
座禅に意味など無いことになる。
なぜか。
「体裁の座禅」にかわる「体裁でない座禅」は，成立のしようがないからである。
なぜ成立しないか。
「体裁でない座禅」の向かう先――「仏」――が，そもそも成立しないからである。
「体裁でない座禅」は，欺瞞である。

禅は，＜とらわれる＞と＜とらわれない＞の対立を，己の立つ瀬にする。
禅は，＜とらわれる＞と＜とらわれない＞の対立に己を賭ける体（てい）で立つ。
しかし，その「対立」は，幻想である。

実際，＜とらわれる＞と＜とらわれない＞の対立は，単にことばである。
そしてこの対立の論理構造は，「相反」ではなく，「ダブルバインド」である。

3　学校の保守

3.0　要旨
3.1　生業
3.2　合理化の論法
3.3　集団心理

3.0　要旨

禅とは，禅学校のことである。
この学校は，己の主義により，学を放棄する。
その主義は，空観である。
空観の含意になる＜無為――作為の棄却＞により，禅は学を立ててはならないものになる。

一方，禅は学校形態は保持しようとする。
実際，学校を無くすことは己の居場所を無くすことである。
禅は，ここではご都合主義につく。

では，この学校は何をする学校か。

禅の自縄自縛は続く。
禅は，何かを立てるということができない。
禅は，＜何物も立てない＞と＜修行＞がイコールになるような修行を立てねばならない。
「＜何物も立てない＞と＜修行＞がイコールになるような修行」は，ナロウパスというものではなく，単にナンセンスである。
ここに禅は，にっちもさっちもいかないダブルバインドに嵌まる。

後は，屁理屈を無理矢理つくるだけである。
そしてつぎが，その屁理屈である：

『臨済録』「示衆」

> 但能　隨縁　消舊業、任運　著衣裳
> 要行即行、要坐即坐。
> 無　一念心希求佛果。
> 縁何　如此
> 古人云、若　欲　作業求佛、佛是　生死大兆。
>
> 但だ能く縁に随って旧業を消し、運に任せて衣裳を著ける。
> 行くを要めば即ち行き、坐すを要めばば即ち坐す。
> 一念心の仏果を希求する無し。
> 何に縁 [よ] ってか此の如くなる。
> 古人云く、「若し作業 [さごう] して仏を求めんと欲すれば、仏は生死の大兆なり」と。

ここでは，＜何物も立てない＞が＜平常＞に代えられている。
なぜそれで納得されるのか。
ここにも，空観の応用がある。

空観は現前の全肯定になる。
「作為を退ける」は，「現前をそのまま受け入れる」になるからである。
こうして，現前は「現成」である。
理は＜平常＞に顕れている，となる。
ここで，強引に論理の飛躍をやる：「*＜平常＞が修行だ*」

禅は，ダブルバインドの体勢で，主義と生業の二股をかける。

3.1　生業

3.1.1　生業う――欺瞞を引き受ける

3.1.1　生業う――欺瞞を引き受ける

「インチキ学校」「学校詐欺」というものがある。
学校の体を成していないのに学生を募ると，これになる。

しかし，当事者は，インチキ・詐欺をしようとして，＜学校の体を成していない学校＞を運営しようとしているのではない。
生業として，＜学校の体を成していない学校＞を運営しようとしているのである。

ひとの一番の大事は，＜生きる＞である。
そして，生きるとは生業うということである。

「師・道場」という生業が成り立つと見る者は，この生業を企てる。
「師・道場」を既に運営している者は，これを保守しようとする。
このとき，「師・道場」が師・道場の体を成しているかどうかは，問題ではない。
生業は，成立するかどうかである。

禅は，ロジックとして，「師・道場」が成立しない。
一方，現実として，「師・道場」が企業される。
生業が，ひとの第一だからである。
この原則は，禅においても当然貫徹される。

3.2　合理化の論法

3.2.1 「*至道無難 唯嫌揀択 纔有言語 是揀択*」
3.2.2 「不立文字」

3.2.1 「*至道無難 唯嫌揀択 纔有言語 是揀択*」

『趙州録』

問、　至道無難、唯嫌揀択、是時人窠窟。
師云、曾有問我、直得五年　分疎不得。

「＜至道は難しくない；選択がだめ〉は、ひとを何もできなくすることですよ」
「前に問うてきたことがあったな、それから五年だが，弁明できんわ」

師示衆云、
　　至道無難、唯嫌揀択。纔有言語、是揀択。
　　老僧　却　不在明白裏。
　　是你　向什麽処　見祖師。
問、　和尚既不在明白裏、護惜什麽処。
師云、我亦不知。
学云、和尚既自不知、為什麽道、不在明白裏。
師云、問事即得、礼拝退。

「至道無難　唯嫌揀択，纔 [わず] かに言語有れば是れ揀択，だ。わしは＜明白＞のレベルにはおらんぞ。
君らは，どこに祖師を見る？」
「和尚のレベルだと，どこを大事にするんです？」
「わしも知らん。」

「知らなくて、なんで、＜明白＞のレベルにないなんて’言うんです？」
「わかったから、礼拝して帰りなさい。」

問、　至道無難、唯嫌揀択。如何得不揀択。
師云、天上天下、唯我独尊。
云、　此猶是揀択。
師云、田庫奴、什麽処是揀択。

「＜至道は難しくない；選択がだめ〉といいますが，どうしたら＜不選択＞を得られますか？」
「＜天上天下、唯我独尊＞」
「それだって＜選択＞でしょう。」
「田舎者め，どこが＜選択＞だ！」

修行僧集団は，もともと優秀な者の集まりだから，「至道無難 唯嫌揀択 纔有言語 是揀択」は変だなとは，みな思っている。
こういう場合は，ボケとツッコミで遊ぶことになる。
上のようにである。
趙州は，「至道」なんてものは無いと達観した余裕のある者なので，ボケ役を引き受けてやるのである。

「禅」に思い入れをする者は，この手の話をたいてい「師が未熟な者をたしなめる・あしらう」のように解説するが，間違いである。

3.2.2 「不立文字」

仏教の「色即是空空即是色」は，空観に退化し，否定論法（「破邪顕正」）に退化する。
禅の「不立文字」「平常心」は，この退化の系列に連なるものである。

否定論法の理屈は，「ネガを以てポジを顕す」である。
「ネガを除いた残りがポジ」あるいは「ネガの反転がポジ」というわけである。

「ネガを以てポジを顕す」は，妄想である。
これが間違いであることは，自明である。
では，否定論法の者は，なぜこの妄想を保っていられるのか？
それは，「ネガ」の具体的リストに，思考停止するからである。
即ち，「どれだけの邪を破ったら正が顕れるのか？」を，問うまいとするのである。――実際，問いを立てることは，妄想を保てなくなることである。

否定論者は，否定する相手があってこその存在である。
その相手は，肯定的言辞を用いる者である。
それは，＜生産者＞である。
否定論者は，＜生産者＞に寄生して生きる存在である。

否定論者は進化せず，生産者は進化する。
否定論者は生産者から引き離されるばかりとなる。

そして，時代遅れの存在――遠い昔の存在――になる。

これは，「否定論者は，自分の時代遅れを意識できない」を意味する。
よって笑止千万の「破邪顕正」は，世につねに満載である。

禅は，ことばを却けて，ことばに騙される。
ことばを却ける者は，自分に都合よくことばを使う者である。
自分に都合よくことばを使う者は，真っ先にことばに騙される者である。
かくして，「不立文字」を唱えるというわけである。

「不立文字」は，「立文字」に対する否定である。
これは，構えに対する否定である。
構えを否定すれば，内容に踏み込まずに済む。
よってこの否定は，ラクな否定である。
この意味で，「不立文字」は消極的否定論法ということになる。
「破邪顕正」を更に退化させたのが，「不立文字」である。

> 「不立文字」を立てる否定は，ラクな否定であって，「根柢的な否定」ではない。――ひとはラクな論法を「根柢的な論法」と取り違えるものなので，この点を強調しておく。

3.3　集団心理

3.3.1 「至道」幻想共同体

3.3.1 「至道」幻想共同体

禅は，教えたり授けたりするものをもたず，そしてもてない。
もてないのは，自分で自分をそう仕向けたからである。

しかし実際には，師が措かれ，学校が営まれる。
教えたり授けたりするものが無くて，どうして学校が成り立つのか。

たしかに，学生は「至道」の思いで学生になった者たちである。
この学生に対し師は，「至道」を匂わす。
しかし学校は，これだけで成立するものではない。

空っぽの学校を成立させるものは，集団心理である。
「*よい学校だから，自分はこれの員でいる*」が正当な論理であるが，集団心理のダイナミクスはこれをつぎのように顚倒する：

「*自分がこれの員でいるからには，*
よい学校であるとせねばならない」

これはもともと，個人の合理化の心理である。
この合理化が，集団的に無意識レベルで進行するのである。
集団的になるのは，同じ境遇にあることが救いになるためである。

禅の学校は，このような学校である。
それは，員の幻想で保っている学校である。
その幻想は，「至道」幻想である。
――もっとも，禅の「至道」ははじめから幻想であるが。

4　欺瞞の力学

4.0　要旨
4.1　何を間違ったのか
4.2　反抗
4.3　師
4.4　退行・退化の相で固定

4.0　要旨

教団は，教義に関しては，やることがない。
教義は，尊士に溯ることになっているから，無謬・不可侵なのである。
しかし何もしないという在り方は，できない。
そこで，教義の「読み解き」ということをやる。

「読み解き」というのは，便利な方式である。
オリジナリティーに弱い者は，「読み解き」を仕事にできる。
そしてこれは，際限無くできる。
こうして教団は，教義に関してはこんなことばかりをやっているところになる。

教団の中から，これに反発する者が出てくる。
このとき彼らは，反体制のスローガンを，「実践」と「正法」にする。
「実践」のスローガンは，《教義の読解で自足》を攻撃するためのものである。
「正法」のスローガンは，《教義を読解しているつもり》を攻撃するためのものである。
彼らは，「実践」と「正法」の二点において，自分を他から差別化しようとする。

教義は，出来上がったものであり，無謬・不可侵である。
そこで，「正法」での差別化は，他を＜浅い＞にして自分を＜深い＞にする形しかない。
こうして反発者は，「*わたしは深く知る者である*」をアピールしていく者になる。

しかし，「深く知っている」は，はったりでしかない。
「*それはどんなのだ？*」の問いには，答えられない。
そこで，「不立文字」を立てる。

この物理に，「合理化」の心理が加わる。
「*自分は正法に至っているが，それはことばにならないものだ*」を，実際に信じ込むのである。

この現象は，ありふれたものである。
自分を他と差別化するのに＜浅い・深い＞を用いる者は，必ず「不立文字」を立てる。
併せて，無意味な文章をつくって，他に見せつける。
「*どうだ，おまえたちにはわからんだろう*」「*分析的に読んでもだめだぜ*」をポーズするわけである。

禅は，この類である。
<u>以上でも以下でもない</u>。

まっとうならば，自分のやっていることがはったりだということが，わかってくる。
そんなことを延々とやっている自分に嫌気がさしてくる。
そしてやめる。
「若気の至り」が，このときの反省の形である。

しかし，ひとを引き込んでしまっている場合は，自覚したときはもう遅い。
引っ込みのつかない立場に自分をしてしまっている。
＜やめる＞ができない。
はったり詐欺を続けるしかない。

禅の学校・師は，この類である。
以上でも以下でもない。

4.1　何を間違ったのか

4.1.1「正」を立てる
——ことばの＜存在措定機能＞の罠

4.1.2　言語のなんたるかを知らない

4.1.1 「正」を立てる――ことばの<存在措定機能>の罠

いま，「ん」と発声する。
すると，ことばの機能として，「<ん>とは何か？」の問いが立つ。
「<ん>とは何か？」の問いが立つと，「<ん>とは何か？」の探求を思いつく。
<ん>の手掛かりは無いから，この探求は「瞑想」になる。
瞑想してると,「<ん>とは何か」を想うことができている気がしてくる。
同時に，この想いはことばには表せないものだという思いをもつ。
そこで，「不立文字」を唱えることになる。
「*至道無難 唯嫌揀択 纔有言語 是揀択*」「*平常心*」を唱えることになる。

禅が立てる「正」は，この「ん」と同じである。
禅は，ことばにだまされる。
「正」のことばに対応する対象があると思ってしまう。
そしてその対象に至ることを，自分の実践課題にする。
課題を「正道」を定めて，これを実践しようとする。

ひとは，このような空回りを，ふつうにやってしまう。
やってしまうのは，言語とは何かをわかっていないからである。

「正」は，存在を問うように「正とは何か？」と問うものではない。
「正」は，ラベルとして使うことばである。
「○○は正しい・△△は正しくない」というふうに使うことばである。

形式言語理論では，「正」は記号「T」(「真理値」) である。

これは，命題 (定言) に付される値である。

「T」は，「正」とか「真」と読まれる必要も無い。
<論理系を構成するための形式的・機能的要素の一つ>――これが「T」の身分である。

評価値を「真・偽」の二値にするとき，その形式言語は「二値論理」であると謂う。
禅シンパの者は，言語を「二値論理」だと言って批判する。
ならば，「二値論理」でない言語を開発すればよい。
科学は，これを実践している。
日常言語も，二値をぼやかす表現が多様・大量に開発されてきている。

禅のような「*だから言語は用いない*」は，科学・生活者にすれば，ただの<幼児性>である。

禅に見るべきは，この<幼児性>である。
<幼児性>での停滞である。
「正」のことばの機能を勘違いし，己の不如意を言語批判・二値論理批判で合理化し，合理化できているつもり，の体(てい)である。

4.1.2　言語のなんたるかを知らない

言語は，「使えるか使えないか」を考えるものではなく，「上手に使う」を考えるものである。
道具は，使い方で生きたり死んだりする。
道具の「使える・使えない」は，道具の問題と使う側の問題の二つがあるわけである。

実際，言語というものは，実によくできている。
生成文法理論というのがあるが，これの意味するところは，言語は生成文法理論を可能とするほどにロジカルだということである。
実際，ことばを覚えることは，高度な論理がそっくり身につくことである。

どうしてこんな高度なものが実現されたのか。
「進化」の妙である。
長い時間の進化は，とんでもなく高度な論理構造を実現してしまうのである。
――自分の体を見よ！

言語はひとがつくろうとしても，つくれないものである。
これは，時間・進化の所産である。
言語への正しい対し方は，これをありがたく受けつつ，さらにこれの高度化に貢献する，といったところである。
ちなみに，「科学」はこれの実践である。

この視点から「不立文字」の者たちを見ると，いかにも見苦しい。
それは，「使えないのは言語ではなく，己の方である」がわかっていない様である。

4.2　反抗

4.2.1　軽蔑
4.2.2　ブーメラン
4.2.3　欺瞞

4.2.1　軽蔑

反抗は，軽蔑するものへの反抗である。
軽蔑するものは，権威である。
そして権威に対する軽蔑は，権威を権威としている者たちへの軽蔑である。

禅のエネルギーは，反抗のエネルギーである。

『臨済録』「示衆」

> 三乗十二分教、皆是　拭不淨故紙。
> 佛　是　幻化身、祖　是　老比丘。

弟子は，師を師と仰ぐ者と，師を自分に並べる者の二タイプに分かれる。

後者は，「*師もただの人間，自分と同じ*」と思う者であり，「*化けの皮をはがしてやろう*」の構えで師に対する者である。
即ち，＜生意気＞タイプである。
後世に伝わる禅のスターは，＜生意気＞タイプである。

＜生意気＞の者は，師を師と仰ぐ弟子たちを軽蔑する。
師については，「*師と仰がれて居心地悪く思わないのは，愚か者だ*」と思う。

「*師と仰がれて居心地悪く思わないのは，愚か者だ*」であるから，「ブッ

ダも，師と仰がれるのは不本意のはずだ」となる。
こうして，＜生意気＞の者は，ブッダも自分と同じ者にする。
この構えを標語にしたのが，「即心是仏」である。

4.2.2　ブーメラン

反抗（「改革」）は，「若者・バカ者・よそ者」がすることになっている。
そのこころは，「現実に疎い」「己を知らない」である。

反抗は，《現実に疎い・己を知らない自分が暴露される》の形で，自分に返ってくる。

4.2.3　欺瞞

反抗は，しっぺ返しを食う。
しかし，反抗する者は，負けになることを嫌う。
せいぜいドローに持ち込もうとする。

こうして，反抗は欺瞞に進む。

4.3　師

4.3.1　タイプ分け
4.3.2　欺瞞
4.3.3　煙に巻く
4.3.4　＜師に非ず＞をパフォーマンスする

4.3.1　タイプ分け

＜師＞を務める者は，つぎのタイプに分かれる：

a.「至道」幻想をもつ者
b.「至道」が幻想であることは知っているが，
　b1.　師の役を生業とすることを有利とする者
　b2.　師の役が好きな者

b タイプの者は，「至道」が幻想であることを知りつつ「至道」を匂わすパフォーマンスをする者である。
これは，欺瞞である。
しかし，欺瞞をよしとしなければ，世捨て人になるか還俗するかになる。
これはラクではない。
現状を惰性で続けることが，ラクである。
こうして，b は，自己欺瞞の方を択ることにした者である。

4.3.2　欺瞞

禅は作為を棄却する。
禅の業は作為であり，よって棄却すべきである。
しかし，自分はその中にいるから，禅の業は肯定せねばならない。
肯定の形はただ一つ，「企てるのではなく自ずと業をする」である。

「企てるのではなく自ずと業をする」は，虚偽である。
「企てるのではなく自ずと業をする」は，これをパフォーマンスすれば，欺瞞である。

禅の師は，欺瞞の者である。
「自分は，企てるのではなく自ずと業をする者である」をパフォーマンスする者だからである。
実際，欺瞞の者にならずに＜師＞になることはできない。

師には，二通りある。
ひとには，切れ者とそうでない者がいる。
切れ者は，確信犯で＜師＞の役に就く。
他は，＜師＞の役が欺瞞であることを知らずにこの役に就いている者である。

＜師＞の役が欺瞞であることを知らずにこの役に就いている者は，幸いである。
その者は，はじめから，自己欺瞞の意識と無縁である。

＜師＞の役が欺瞞であることを知っていて師になる者は，どうか。
自己欺瞞の意識を抑圧できる可能性がある。
実際，心理の機序は，抑圧したいものを抑圧できるようになっている。

欺瞞の抑圧には，欺瞞の合理化が用いられる。
欺瞞は《師であって，教えるものをもたない》であるから，合理化の形はただ一つである。
即ち，「*＜教えてもらう＞を却けるのが，＜教える＞だ！*」である。
これでめでたく「師であって，教えることをもたない」の成立となる

残るは，自己欺瞞の意識を抑圧できない者である。
この者は，確信犯として師を務める者である。

4.3.3　煙に巻く

＜教えるものをもたない師＞のパフォーマンスは，《＜道を匂わせる＞と＜道についての問いを却ける＞を同時にする》である：
意味ありげにはぐらかすというわけである。

つぎは，学生を修行につなぎとめるパフォーマンス：

『趙州録』

> 問、　正修行底人、莫被鬼神測得也無。
> 師云、測得。
> 云、　過　在什麽処。
> 師云、過　在覓処。
> 云、　与麽　即不修行也。
> 師云、修行。
>
> 「正しく修行している人は，鬼神に見透かされなく無くなりますか？」
> 「見透かされるね」
> 「誤りは，どこにありますか？」
> 「誤りは，覓 [もと] めるところにある」
> 「そんなら，修行しませんよ」
> 「修行しろ」

> 問、　如何是　正修行路。
> 師云、解修行　即得。若不解修行、即参差落　他因果裏。

「どんなんですか，正しい修行の路は？」
「修行を解せば即ち得る，だ。
解さざれば，他 [か] の因果の世界に落ちる。」

問、　了事底人　如何。
師云、正大修行。
学云、未審　和尚還修行也無。
部云、著衣喫飯。
学云、著衣喫飯尋常事。未審　修行也無。
師云、你且道、我毎日作什麽。

「悟った人は，どんなですか？」
「まさに大いに修行だ」
「え？和尚も修行してるんですか？」
「衣を着け，飯を食ってるよ」
「衣を着け飯を食うはふつうのことでしょう。修行してるんですか？」
「そんなら言って見ろ。わしは毎日何をやっている」

そしてつぎは，学生から「道」を問われたときの，対応パフォーマンス：

『趙州録』

問、如何是道。
師云、墻外底。
云、不問者箇。
師云、問什麽道。

云、大道。
師云、大道通長安。

「どんなものですか，道とは」
「へいの外にあるだろう」
「それをきいているんじゃありませんよ」
「どんな道をきいているんだ」
「大道です」
「大道なら長安にある」

師　示衆云、
　　各自有禅、各自有道。
　　忽有人問你、作麽生是禅是道、作麽生祇対他。
僧乃問、既各有禅道、従上至今　語話　為什麽。
師云、為你遊魂。
学云、未審如何為人。
師乃退身不語。

「それぞれに禅が有り、道が有る。
もしひとから禅とは何か道とは何かと問われたら，どう応える？」
「それぞれに禅・道が有るなら，とりとめのない議論は何のためです？」
「君のために魂を遊ばせてやろうというのさ」
「へぇー？どういうぐあいにそれが人のためなんですか？」
師は退身不語

見掛けは＜青臭い者をあしらう＞だが，師の＜青臭くない＞は何かというと，身につけた欺瞞である。

禅に思い入れをする者は，上のようなやり取りに思い入れをする。
即ち，「*師の奥深い思慮が示されているはずだ*」の思いで，読み解こうとする。
勘違いの深読みは，きりがない。
よって，延々と続けられる。

4.3.4　＜師に非ず＞をパフォーマンスする

「至道」が幻想であることは知っている師Ｘは，＜師＞という存在が欺瞞であることを知っている者である。
且つ，そうとは知りつつ，師でいる方がそうでないよりラクなので，師の地位に収まっている者である。

学生は，師を師と仰ぐタイプ（Ａタイプ）と，師を自分に並べるタイプ（Ｂタイプ）の二つに分かれる。
Ｂタイプは，Ａタイプを軽蔑する。

Ｘは，学生のときはＢタイプの学生であった。
よって，自分は師と仰がれる者には金輪際なるまいと思う。
「*先生と言われる程の馬鹿でなし*」というわけである。
こうしてＸは，師のように扱われることに，こと細かく抵抗する。

これは，学生たちにとって，めんどうくさい限りである。
師に対する学生の追従は，追従しないという形が無いからやるというものである。
実際，これを「礼儀」という。

というわけで，つぎのようなことになる：

『祖堂集』

> 師　欲順世時、向第一座　云、
> 　　百年後　第一不得　向王老師頭上汚。

第一座　對云、
　　終不敢造次。
師云、
　　或　有人問　王老師什摩処去也、
　　作摩生向他道。
對云、
　　帰　本処　去。
師云、
　　早是　向我頭上汚了也。
却問、
　　和尚　百年後　向什摩処去。
師云、
　　向　山下檀越家作一頭水牯牛　去。
第一座云、
　　某申　随和尚　去
　　還許也無。
師云
　　你　若随我　銜一束草来。

「おれが死んだ後，おれの顔に泥を塗るようなことはしてくれるな」
「そんなことしませんよ」
「老師はどこへいった，とひとから問われたら，何と答える」
「本処に帰ったと言います」
「ほら，もうおれの顔に泥を塗ってる」
「じゃあ，どこへ行くというんですか」

「あそこの牛にだよ」
「わたしも和尚に随いますよ，いいですね」
「随うなら，わらを銜(くわ)えて来い」

これは，めんどうくさい和尚の滑稽話として読むのが正しい。

4.4　退行・退化の相で固定

4.4.1　思わせぶり
4.4.2　なぞなぞごっこ

4.4.1　思わせぶり

禅は，道を立てる。
道は「何かへの道」として立てるものであるが，禅の立てる道には，その何かが無い。
何かが無いのは，何かを立てられないからである。
立てられないのは，もともと立てるものを持っていないからである。

最初は，「何かへの道」として，道を始めようとしたのである。
「真理」の類をゴールに想定したわけである。
しかし，探ってみると，そんなものは無いことがわかってくる。
だが，既に己を師となし学生を呼び込んでしまっていると，引っ込みがつかない。
彼らを学生の身分に納得・満足させねばならない。

こうして師は，＜思わせぶり＞を用いることになる。
そしてこれを身につけ，自分で自分をわからなくしていく。

禅の修行は，修行を自己目的化した修行である。。
禅は，空手形で，道場を開設する。
道場の師は「道を知る者」を装う。
「*自分はわかっているけど，それはことばにできないものなんだ*」を，パフォーマンスする。

学生は，師のこのパフォーマンスを信じてしまうか，「アホか」と言って去るかのどちらかである。

信じてしまった者は，道場に住み込み，日課の形に纏められた修行に努める。

この道場は，惰性である。
何も無く，何も起こらない。

『趙州録』

師上堂、示衆云、

金仏不度炉、木仏不度火、泥仏不度水、真仏内裏坐。
菩提涅槃、真如仏性、尽是貼体衣服、亦名煩悩。
不問　即　無煩悩。
実際理地、什麽処著。
一心不生、万法無咎。
但究理而坐、二三十年。
若不会、截取老僧頭去。

夢幻空花、徒労把捉。
心若不異、万法亦然。
既不従外得、更拘什麽。
如羊相似、更乱拾物、安口中作麽。

老僧見薬山、和尚道、有人間著、但教合取狗口。
老僧亦道、合取狗口。
取我是垢、不取我是浄。

一似猟狗相似　専欲得物喫，仏法向什麽処著。

一千人万人　尽是覓仏漢子，覓一箇道人無。
若与空王為弟子、莫教心病。最難医。
未有世界、早有此性。
世界壊時、此性不壊。

従一見老僧後、更不是別人。
只是箇主人公。
者箇更向外覓作麽。
与麽時、莫転頭換面。
即失却也。

師上堂して、衆に示して云く、

金仏、炉を度 (わた) らず。
木仏，火を度ず。
泥仏、水を度らず。
真仏、内裏に坐す。
菩提・涅槃・真如・仏性、尽く是れ体に貼 (つ) ける衣服なり、亦た煩悩と名づく。
問わずんば、即ち煩悩無し。
実際理地、什麽 (なん) の処にか著かん。
『一心の生ぜずんば、万法咎無し。』
但だ理を究めて坐すること、二三十年せよ。
若し会せずんば、老僧 (わたし) の頭を截 (き) り取り去れ。

『夢幻空花、徒らに把捉を労す。』
『心若し異ならずんば、万法も亦た然り。』(『信心銘』)
既に外従 (よ) り得ざれば、更に什麽 (なに) にか拘らん。

羊の如くに相似て，更に乱りに物を拾うて口中に安きて，作麽 (なにかせん)。

老僧，薬山に見 (まみ) えしとき、和尚道 (い) えり、
『人の問著する有らば、但だ狗口 (くち) を合取 (とじ) せしむ』と。
老僧も亦た道う、『狗口を合取よ』と。
『我れを取るは是れ垢、我れを取らざるは是れ浄なり。』(『維摩経』弟子品)

(だれもかれも) 一に猟狗に似て相似て、専ら物を得て喫せんと欲す。
仏法，什麽の処にか著かん。
一千人万人、尽く是れ＜仏を覓 (もと) むる＞漢子なり。
＜一箇の道人を覓むる＞、無し。
若し空王が与 (ため) に弟子と為らば、心をして病ましむること莫れ。
最も医し難し。
未だ世界有らざるに、早 (すで) に此の性有り。
世界の壊する時も、此の性は壊せず。

一たび老僧を見てより後は、更に是れ別人ならず。
只だ是れ　いっ箇の主人公なり。
者筒、更に外に向って覓めて作麽 (なにかせん)。
与麽 (ど) の時も、頭を転じ面を換ゆる莫れ。
即ち失却せん。

4.4.2　なぞなぞごっこ

禅は，反＜分析・構築＞である。
禅は，反＜分析・構築＞で，自縄自縛する。

反＜分析・構築＞は，言語が使えなくなることである。
なぜか。
言語は，論理形式である。
論理形式であるとは，これを用いれば論理的になってしまうということである。
そして，論理的になってしまうとは，分析的・構築的になってしまうということである。
分析的・構築的になるのが嫌なら，言語は捨てるしかない。

禅僧で食っていくためには，ひとから敬われる行動をしなければならない。
言語を捨てるなら，＜パフォーマンス＞ということになる。
苦行とかボランティア活動とかである。
＜パフォーマンス＞を択らないなら，言語行為である。

禅は，＜パフォーマンス＞を択らない。
で，結局どうなるか。
《言語を捨てたふうをして言語行為をする》となる。

この位相から，かれらは「なぞなぞ」という言語様式を開発した。

「公案」である。

「公案」は，知的ゲームとして遊んででいる分には罪はない。
しかし，＜意味深＞を見せかけるようだと，罪である。
はったりになるからである。
実際 ,「公案」の機能は,

・相手を煙に巻く――煙に巻かれた相手は，意味深と勘違いする
・これを用いる者は，自分で自分を騙す者になる

である。

反＜分析・構築＞は，退行・退化の道である。
「公案」の実態は児戯・戯れ言というものであるが，これを＜意味深＞
として互いに騙し合う系ができていくのである。

5　科学の時代の禅

5.0　要旨
5.1　禅の学術的意味：「思考類型」
5.2　禅に惹かれる者たち――類型

5.0　要旨

ここまでは,「温故知新」の「故」として, 禅を主題化してきたことになる。
一方，禅は，いまも現象として存在している。
そこで最後に，この禅について簡単に触れておくことにする。
観点は,「科学の時代の禅」である。

現前の禅には，既に＜時代へのインパクト＞というものはない。
第一に，禅の思弁は，現代の眼で見れば，ただの迷走である。
第二に，禅が＜時代へのインパクト＞になるようなムーブメントが起こるとすれば, それは「ニューエイジ」のようなスピリチュアリズム･ムーブメントということになるが，ネットワークによって情報が個人化かつグローバル化する今日，そのようなムーブメントは＜嘲笑＞によってすぐに抑え込まれてしまう。

実際，ムーブメントは，メディアとの共犯関係で起こる。
大きなムーブメントは，マスメディアとの共犯関係で可能になる。
情報ネットワークは，マスメディアを信用されないものにする。
こうして，大きなムーブメントは不可能なものになる。

原発事故で，政府・マスコミは情報操作ができなかった。
個人やグループが，各地域の放射能汚染の数値をはじめとして，様々な情報・知見をネットワーク上で交換し合ったからである。
マスコミに登場する「学者」のインチキな論を，ネットワーク上でその都度曝くことができたからである。
逆に，ネットワークが無かったら，政府・マスコミによる情報操作が成ったわけである。

20 世紀は，イデオロギーとムーブメントの時代であった。
イデオロギー，ムーブメントを先導したのはマスコミである。
情報ネットワークの登場は，マスコミによる情報寡占を終わらせる。
そしてこれは，イデオロギーとムーブメントの時代の終焉である。

「*メディアによる一億総白痴化*」の「白痴」の内容は,「低俗」ではない。
「イデオロギー」「ムーブメント」である。

マスコミの情報寡占の終わりは，なぜイデオロギー，ムーブメントの終わりになるのか。
イデオロギー，ムーブメントは，自家撞着 (「二股をかける」) である。
マスコミは，自家撞着の隠蔽を以て，イデオロギー，ムーブメントと共犯関係をもつ。
情報ネットワークは，この隠蔽を不可能にする。
無数の個の多様なツッコミは，イデオロギー，ムーブメントの自家撞着を暴露する。

「*エコロジー*」は，ネットワークの時代にはムーブメントにならない。
「*エコロジー*」は，＜えこひいき＞――恣意的な選択――がこれの内容である。
この「二股をかける」が，あからさまにされるからである。

翻って，禅を意味ありげにしてきたものも，情報寡占である。
権威は，情報寡占でつくられる。
専門家とは，情報へのアクセスにおいて優位な者のことである。
禅の専門家・権威として自分を立てる者は，禅を意味ありげに論ずる。
実際，自分の生業を損なうようなことを自分からする者は，いないわけである。

情報ネットワークは，専門家・権威による情報寡占を壊してしまう。
一般者が，原典や希少テクスト，専門書に，容易にアクセスできるようになるからである。
そして，一般者が文献に容易にアクセスできるようになるとき，禅の意味ありげの様は終わりになる。
現代の眼で見れば，それはただの迷走だからである。

5.1　禅の学術的意味：「思考類型」

5.1.1　科学：「自己組織的生成」観を以て自然探究
5.1.2　禅：「空」観を以て自足自閉

5.1.1　科学：「自己組織的生成」観を以て自然探究

科学の実験・観察は，「法則」に至るためである。
その法則は，結局，生成の法則である。
科学は，物事を「生成」として捉えようとする。

自然の科学は，複雑系の科学になる。
このときの「生成」は，「不可逆的自己組織化」をダイナミクスとするものになる。

例えば，生物進化。
アリの生態の「社会性」は，現前のアリを調べてもわからない。
「自己組織化」――様々な系の複雑な絡み合い――の歴史の所産だからである。

註：現前から歴史を導くことはできない。
　　共時と通時は，次元の違うものだからである。

「自己組織化」とは何か。
「量から質への転換」ということばがある。
その意味は，「個の集まりは，自己組織化して，全体で一つの＜個＞の相を現すようになる」である。
これは，「スケールは質に転換する」とも言い換えられる。
実際，存在は階層構造を現す。
スケールが変わると存在が変わるのである。

こうして，科学は「存在の階層構造の探究」の趣きになる。
探究の相手は，膨大である。
探究は，手分けして行うものになる。
そしてその＜膨大＞が＜際限のない膨大＞であるために，科学は際限なく「分科」をつくっていくのが定めとなる。

5.1.2　禅：「空」観を以て自足自閉

禅は ,「空」観を以て自閉する。
「只管打坐」などを言うわけである。

この自閉は,《自分の中にすべてがある》とする立場である。
こうして，世界を先取する。
この世界先取は，アニミズムと同型である。
「空」観が宗教になる所以である。

かくして，科学と対比したときの「禅」の特徴づけは,「自足＋自閉」である。

この特徴づけは，科学の時代にひとが禅に向かう理由を説明する。

社会は，ひとを疲れさせるところである。
その社会が科学万能で回っているように見えるとき，科学はひとを疲れさせる。
ひとは，社会に，そして科学に，疎外される。
そしてこのとき，彼らは「原始的自給自足」に憧れることで癒されようとする。
このアニミズム的「自足＋自閉」願望が, 禅の「自足＋自閉」と重なる。
こうして禅が彼らを惹きつけるものになる。

「自足＋自閉」にも，それ固有の「学力」というものがある。
禅の学力は，これである。

その学力は，禅の文献，禅のガイド書等に顕れている。
本論考が禅を主題にするのは，教育学的関心からであり，この関心の中に,「自足＋自閉」の学力を同定しておきたいというのがある。

5.2　禅に惹かれる者たち――類型

5.2.1　信仰
5.2.2　知的退行
5.2.3　ホーリズムへの退行
5.2.4　スピリチュアリズム
5.2.5　勘違い

5.2.1　信仰

「科学の時代の禅」の題目の趣旨は，宗教に科学を対立させることではない。
いまは，宗教の教義が科学の内容を規制する時代ではない。
宗教と科学の比較は，今日では無用のことである。

宗教は，科学の時代にも生き残る。
なぜか。
宗教に，科学に時代に見合う内容があるからではない。
単に，人間は変わるものではないからである。

宗教とは，教団――信者の集団――のことである。
教団が生じたり消滅したりという現象は，時代と関係ない。
宗教は普遍的である。

宗教の「普遍的」の意味は,「信仰によって救われようとする者の存在は,時代と関係ない」である。
信仰によって救われようとするタイプの者が常に存在し，彼らを回収しようとする宗教が常に起こる。
宗教は個々に，「救い」の営業である。
一個の「救い」営業の成立が，即ち一個の宗教の成立である。

5.2.2　知的退行

科学の時代に，宗教はなぜ生き残るのか。
宗教に，科学に時代に見合う内容があるからではない。
単に，人間は変わるものではないからである。

進化は，「階層」で説明される。
旧いものが新しいものに取って替わられるのではなく，旧いものの上に新しいものが積まれるのである。
「延髄 - 小脳 - 大脳」の脳モデルと同じである。

強固なのは，旧いものの方であって，新しいものの方ではない。
年期の差が圧倒的だからである。
新しい層は，ちょっとしたきっかけで，消し飛んでしまう。
そして，旧い層が表に出てくる。

ヒト Homo は，百万年以上の時間を，自然を畏怖して生きてきた。
ひとは，神を立てて手を合わせるのが，居心地がよい。
そんなカラダをつくってきたからである。
対して，科学はひとにとってひどく居心地の悪いものである。
宗教は，このダイナミクスによって，科学の時代にも生き残る。

生活はめんどうなことが多い。
原始に戻ってゆったりしたいと思う。
その「原始」は，都合よく想像された「原始」である。
ひとは，このような退行欲求をもつ。

仕事が分析三昧だった者は，ホーリズムに退行する。
「数多くのインテリが宗教の門を敲く」は，このようなことである。

なぜ宗教か。
インテリは，退行趣味においてもインテリ趣味だからである。
彼らには，宗教の胡散臭さが，インテリ臭に感じられるのである。

しかし，退行がいかにしぜんなものであっても，科学の時代には退行は抵抗がもたれる。
このとき，知的に見える宗教があったら，都合がよい。
そして，禅がピッタリのものになってくれるというわけである。

禅は，彼らを呼び込む。
「公案」とか「座禅」とかの意味不明が，彼らを呼び込むのである。
インテリは，意味不明に対するとこれを意味深に受け取る者だからである。

禅とは，＜思わせぶり＞の物言いの開発のことである。
禅がインテリを呼び込むのは，禅に奥深い何かがあるからではない。
単に，意味不明を売り物にするものに引っかかりやすいのが，インテリだからである。
翻って，禅の大衆化は，大衆のインテリ化を要する。
そして，「大衆のインテリ化」が実現されるようになってきたのが，今日というわけである。
――かくして，科学の時代の仏教は，葬式仏教と，観光仏教と，禅の三つである。

5.2.3　ホーリズムへの退行

「禅」を思想的に持ち上げる者がいる。
《「禅」はいまの時代にも / にこそ有効である》を唱えるわけである。
このとき彼らは，「合理主義」に「禅」を対置するのをスタイルとする。
いまの時代を合理主義の破綻と見て，「禅」に合理主義の超克を見ようとするのである。

彼らの発想は，「ホーリズム Holism」の括りの中に入る。
ホーリズムとは，つぎのような思想である：

「天網恢々疎にして漏らさず」(『老子』)
「神は天にいまし、全て世は事もなし」(Robert Browning) (註)
「柳緑花紅　真面目」(蘇軾？)

即ち，現前を＜全体的秩序で完結されている系＞と見る思想である。

「ホーリズム」は，ミスリーディングな思想である。
「*合理主義かホーリズムか*」の絵図を描くからである。
ひとはこの絵図に対し，「*自分はどっちだ*」で応じてしまう。
そして，合理主義はひとを疎外するので，ひとはホーリズムをとることになる。

要点は，「*トップダウンかボトムアップか*」の問題が，「*合理主義かホーリズムか*」にズラされているということである。
ホーリズムの＜秩序＞は，トップダウンの秩序である。
トップダウン秩序は，合理主義の対立概念にはならない。

ユークリッド幾何学は，合理主義であって，トップダウン秩序である。

科学は，「秩序・系」を，ボトムアップの生成として捉える。
存在が「色即是空空即是色」「縁起」なのは，ボトムアップの生成になるものだからである。

即ち，ボトムアップの生成は，存在を＜存在の階層＞として現すことになる。
この場合，階層のシフトによって，現れてくる存在が変わる。
「色即是空空即是色」となるわけである。
存在は，下位の存在を要素ないしモジュールとする系――関係性――である。
「縁起」というわけである。

ボトムアップ存在論の探求は，科学になる。
対して，トップダウン存在論は，探求のしようがない。
実際，ホーリズム信者にできることは，座禅 (瞑想) をパフォーマンスするくらいである。

ひとは科学に疎外されるので，科学を嫌う。
しかし，科学を嫌って座禅に＜意味深＞を求めようとするのは，＜安直・甘え＞である。
これの先は，退行・退化の一途である。

思想は，＜ストイック＞を立場にする。
ストイックでなければ，科学 (リゴリズム) への橋渡しが成らないから

である。

仏教思想は，「色即是空空即是色」「縁起」の存在論が直接立てられたときがピークであった。
この存在論は，物理として，いまの時代にも通用するものである。
これ以降は，退行の過程である。
ボトムアップの存在論がトップダウンの存在論に顚倒される。

禅においては，「仏性」がこのトップダウン存在論にあたる。
《禅は「仏性」論を以て＜全体的秩序＞信者を迎える》の絵図になるわけである。

註 : "Pippa's Song"
from Pippa Passes: A Drama.(I. Morning), 1841.

The year's at the spring
And day's at the morn;
Morning's at seven;
The hill-side's dew-pearled;
The lark's on the wing;
The snail's on the thorn:
God's in His heaven--
All's right with the world!

時は春、
日は朝、

朝は七時、
片岡に 露みちて、
あげひばり、名のりいで、
かたつむり、枝にはひ、
神、空に しろしめす、
すべて世は 事もなし。
（上田敏 [訳]）

5.2.4　スピリチュアリズム

宗教は，相手に沿えることがゴールである。
――この意味で，宗教は利他主義である。
相手に沿う方法は，「方便」である。
宗教の進化は，方便の進化である。

禅は，正覚主義である。
――正覚するのは己であり，禅は己主義である。
「正」は，当て込みである。
当て込みであることを隠蔽しようとして，「不立文字」を立てる。
「不立文字」は，屁理屈である。
禅の進化は，「不立文字」の屁理屈の進化である。

禅の正覚主義は，＜思わせぶり＞をポーズすることになる。
このポーズは，スピリチュアリズムと相性がよい。

宗教に科学を対置することはナンセンスだが，スピリチュアリズムは科学が無視できないものである。
スピリチュアリズムは，科学攻撃だからである。
スピリチュアル主義は，疑似科学をつくる。
疑似科学を以て科学と対立する。

こうして，宗教に科学を対置することはナンセンスだが，禅に科学を対置する
ことはナンセンスとはならない。

5.2.5　勘違い

ひとが禅にひかれる理由には，＜勘違い＞というのもある。

西洋人が東洋的なものにひかれるのが，わかりやすい例になる。
「何かありそう」という当て込みで，座禅なんかをする。

この「何かありそう」は，勘違いである。

『臨済録』「示衆」

但能　隨縁　消舊業、任運　著衣裳
要行即行、要坐即坐。
無　一念心希求佛果。
縁何　如此
古人云、若欲　作業求佛、佛是　生死大兆。

但だ能く縁に随って旧業を消し、運に任せて衣裳を著ける。
行くを要めば即ち行き、坐すを要めばば即ち坐す。
一念心の仏果を希求する無し。
何に縁 [よ] ってか此の如くなる。
古人云く、「若し作業 [さごう] して仏を求めんと欲すれば、仏は生死の大兆なり」と

6　閉じ

6.1　おわりに

6.1　おわりに

一つの定言が真理として立てられる。
この定言が信じられることになったら，それは迷信である。

「迷信」の問題は，迷信かそうでないか，ではない。
問題は，その定言の系が，定言を更新し続ける系か，それとも定言を固定する系か，である。

前者は，科学である。
科学は，己が立てる定言を信じない。
つぎには否定されるものとして，定言を立てる。
科学は, 己の営みが＜修正＞を方法とする自己組織化であることを, 知っているからである。

後者は，宗教である。
したがって，宗教は開祖がピークになる。
実際，仏教は，ブッダがピークであり，後は退化の一途である。

禅は，とりわけ「言語詐欺」という形の退化である。
よく言えば，「アヴァンギャルド」である。

アヴァンギャルドに引っかかるのは，インテリである。
禅が今日的な主題になるのは，それがインテリ論――知識人批判――になるからである。

人間は，合理主義に際すると，＜退行＞のベクトルを伸ばしてバランスをとろうとする。
合理主義の中に棲まわされる者は，意識下で，＜退行＞を合理化してくれるものを求め続けている。
インテリとは，このような人種である。

「インテリ」とは, 社会組織の中のその存在相に対する名称であって,「インテリジェンス intelligence」とは無関係である。
インテリは，アヴァンギャルドが言語詐欺であることを知らない。
彼らは，アヴァンギャルドを新鮮な思想のように思う者たちである。

人間は，生物進化の流れの中に存在している一つの種である。
人間の生物的本質は，文化・社会的な変化では変わるものではない。
革新・革命の類が必ず失敗するのは，人間は変わるものではないからである。

註：本論考は，つぎのサイトで継続される (これの進行に応じて本書を適宜更新する)：

http://m-ac.jp/thought/zen/

宮 下 英 明（みやした ひであき）

1949 年，北海道生まれ。東京教育大学理学部数学科卒業。筑波大学博士課程数学研究科単位取得満期退学。理学修士。金沢大学教育学部助教授を経て北海道教育大学教育学部教授 (数学教育専門)，2015 年退職。

禅とは何か

—— ダブルバインド型自己欺瞞の系力学 ——

2018-04-18　初版アップロード (サーバー：m-ac.jp)

著者・サーバ運営者　宮下英明

サーバ　m-ac.jp

http://m-ac.jp/

m@m-ac.jp